





瓜の夢の序の一部分

序

我に似るふたつにわれ—真菜瓜とはむか—  
 道の谷戸入門の果に對して似て似ずれといへる  
 おしえのほしめなりとそされい世に物学人  
 のたま—師の密を嘗<sup>ナメ</sup>得て玉に七わたの糸を  
 わたせ了才覚ありともかの誕を紙うすといふ  
 事なし左右の妙あるすひを捨向上の一路いと  
 是末<sup>ナ</sup>ながらん只勉ておもふ—つとめて学  
 一し 爰に師あり師を瑤山といひ弟子を三  
 軒と呼よくつかへて影のこくと杖のこくと手



をたすけ足もさすりてこと一卯の花丹ながく  
 下野国にたとき山ふみして四譯にみつる御ひ  
 かりをぬがつかき奉しより猶かへるさの夏かし  
 こ富家のやとり朝寝をゆるされ農家に臥て  
 八幸若を祝す 其完るところ皆はソかいをも  
こと此也  
 こそれは瓜田に履の堅いをはなれ裸に盗人の  
 欲気なけれハうりとふりとの仮名つかひより  
 兒の顔かく姿の論まて言の葉の種ならすとい  
 ふ事なし 此花ひらき此実あすひて終みんと  
 つの集なり 瓜の蔓を題す 門人みき祢是を

書样に投して京都の市にひきき （天正） 一昧ももろ人に （海） 人 （とす）  
 其志の淺うさるハおに一の各打して考を去る （筆） 筆 （とす） 筆 （とす）

トにとり 昔ま水無水月下句

（巻中）

（北相）



東都 摩訶窓 瑤山門人

みき祢述

城 明和丁亥の夏下野の国に遊ひおろの八鳥  
 なるなつかしく三杵は師の遊囊をたすけ師は  
 三杵が笠を擔ふて乾坤無位の旅人とい  
 たり、まくら香と聞へし 許賀のおまや遠か  
 りぬほとり高よしといへる里に相し水る風駱  
 の友ありて日教ふ了終ある夜人くにいさなほ  
 水 （とす） の閑院を驚かし文の臺にまとるす や  
 俳諧を （とす） りてあるしの響應ハ看杖の美しき  
 山海の初々の席子みちて上戸は彼至ニのみ下





をたすけ足もさすりてこと一卯の花丹ながく  
 下野国にたとす山ふみして四澤にみつる御ひ  
 かりをぬかつき奉しより猶かへるさの爰かし  
 こ富家のやとり朝寝をゆるされ農家に臥て  
 八幸若を祝す 其定るところ皆はソかいをも  
と見也  
 とすれは瓜田に履の堅いをはなれ裸に盗人の  
 欲気なけれハうりとふりとの仮名つかひより  
 兒の顔かく姿の論まで言の葉の種ならすと  
 ふ事なし 此花ひらき此実あすひて終みんと  
 の集なり 瓜の蔓を題す 門人みき祢是を

竹に投して名都の市にひききり味もろくに  
 の浅うされハおに一の名打して考を去る 筆し香中庵

の意下にとり 昔交水無來月下句

（巻中）

（世相）



東都 摩訶窓瑤山門人

みき祢述

垣ハ明和丁亥の夏下野の国に遊ひおろの八鳥  
 ちんなつかしく三杵は師の遊囊をたすけ師は  
 三杵が望を擔ふて乾坤無位の旅人とい  
 たり まくら香と聞へり 許賀のおまや遠か  
 らぬほとり高よしといへる里に相しゆる風駱  
 の友ありて日教ふ了終ある夜人くにいさなほ  
 小 閑院を驚かし文の臺にまとるす や  
 俳諧をりてあるしの響態ハ看候の美しき  
 山海の初々の席子みちて上戸は彼至ニのみ下



戸ハ是を喰ハ既ニ酒餅ニおよびてしりへに落  
 たりかんニ一なくとれ前に落たるみ、おねハ  
 ち、おとす。此時院主瑠璃に何て瓜もあから  
 す酒<sup>師</sup>もあからす。何かふとつふやゆわゆわは  
 かなはるすりおかし<sup>(おが)</sup>忘りのいへる八木下着狭  
 守吾妻にあもふかる、時中白原のやとりにて  
 五月五日古郷のこともふひ出て何となくう  
 めかれし言葉を近習のおのこの間とあめを  
 は市哥のやうにつ、お侍るといへるを文字に  
 うつし給ふ。さへは妻子とものけふいふふ

(大東京文具チエーン特製)

ん、思ふらん、あやめあり有りやとのうち  
 にと哥にハなりたりとそ、よく氏傍にかよひ  
 ておかし。是に附へた句ハいか、なるべいと  
 筆をとりにて  
 瓜もあからす酒もあからす  
 と吟しけハは誑豊うち黙頭て  
 上臈の悟氣なと、ハ足之ねと也  
 又院主孟存み、とうけて瓜もたへたり酒も  
 たへたり。ちや存と、無し玉へは人、是に  
 も附句あるへきもや。まかまほしと豊原下に



戻りには馬島へ杖を置て来  
 されは一字二字の遠ひより寄のかはること  
 哲ねもころに説れ近く老師雪中居士によろす  
 の磯つたひせうれし吹ある席にて多葉粉盒と  
 いふ前句にふたりの人物まといと解て色  
 の附句あり、是うを味へ玉ふべしとなり、是  
 にをの／＼瓜といふ字をむすひてかゝる句に  
 はいか、附らん、以句にいかなる趣向もや  
 と問はかりの響の聲に應ずるかこと、其句こ  
 は

大東京文具チエーン特製

多葉粉もきうひ瓜もまいらす

薄縁を貸せば使は高断

是は宮仕の娘の方よりかす言おくりたる

トや返こした、めるうちの一睡なりむ

菓子喰せ瓜喰せす

湯治するうち墨画の陰言(馬カ不唱)

此中には魏王の妾せし龍陽矣とある

かの金剛の禁物何と手帳くりかえしたる

ハ那智高野のまろうとに書もはせんとめした

にて見へていよ／＼あけ小深し猶墨画の句作



は紅粉せさる姿をよせたり

瓜ハ喰ふても酒は飲水す

婚禮の世訛した翌のふり薬

夕尸の七合入をほして午秋葉まこうたひたう

ハ此人たうむ

酒ハ飲ても瓜は喰水す

さりながら瘧の洞洞日は夏ころに

乱におよはすと仰ら小た水は孔夫子も上戸な

れ有と、学者めけは端尻のうす着もこなたよ

りの呉足は開い小ぬ片意地もりなるし

茶も市嫌ひて瓜もあからす

京馴ぬ入院披露の緋の衣

中啓をかまへてすはらせ玉ふにさしあかひた

るは九十九髪の姨なから歯をあらはしてしう

まされと安樂行品の趣を守る質朴の上人は猶

く尊きにや

そこらも瓜の皮たうり也

祭禮の跡ハ鳥居もやま鳥

嘉例の夜是居も明ほりをうたひて村中さゝめ

きたるは月出度豊年なるし



瓜十はかりのせてある盆  
紅染の衣のきいた子をうけ  
四五枚のものしりにて象方規矩たのみの玄  
関なる子や

揚枝を添へ四にあき瓜

風薫る女中の使者と墨染と

供ハ市菜の札提て護摩の御釈には大鷹紙の目

録たしかなるべし。

最うひときれと瓜喰たがる

手習ひの子おれぬ姉もかしこまり

(大東原文具チエーン特製)

かの鬼若丸もいひつへき弟のわやくものもこ  
ちらに再び居るにや

人の見ぬ問は瓜も喰ふ也

傾城の傾城買ふて蚊屋の内

綾羅のしとね七寶の櫛笄もいと夜の古みに落

し茶酌を髪にかさせるなと青樓中の洒落には

韻塞貝あはせもおかしからてかゝる遊ひもか

すくなくむ

これらの即答は何れも歎美せし中にひこりの

喜ハへるハ斯自在に句も付玉ハ一句に八體







瓜をふたつにきりかけて置

厨から笥つゝきの車井戸

素林之舞に合す庵下の廻板つきも俄客に手の

まはらぬ臺所なる一し

天相

瓜をふたつに切りかけて置

夕立の時は筑波も遠かす

唐尾に干なり一たるつさ麦の秋ハいつ国も同

しいをかしき夕暮あふむ 或人云天相の名目

に筑波ハハカ、師答句 ？ に體用といふものあり

(大東京文具チエーン時器)

リ、と水を合て見玉へ遙に勅然こしと雲起り  
たるに傾盆の一雨忽なるとさまえ  
されば此小  
け句作の用としる一し

時分

瓜をふたつにきりかけて置

鶏のひよこ三ツ四ツ 暮か、り

最早あるしの戻るならんと菜こしらへの中に

ひよこの餅飼はひよこ一ほやまーきこ、ろは

にや

時節



似をふたつにきりかけて置

干サ<sup>?</sup>くくと晴て土用の時津風

さみ左水の雲き小く<sup>?</sup>に十八土用もなり<sup>?</sup>い<sup>?</sup>通

し<sup>?</sup>何事もさし置て小神櫃あくるな<sup>?</sup>る<sup>?</sup>な<sup>?</sup>る<sup>?</sup>一

時宜

似をふたつに切かけて置

涼風に地のを<sup>?</sup>床のやま

賈島かいにしへにならうて推敲の文字を相る

や西行のあかしをしただふて三十一文字をやら

(大東京文具チエーン特製)

る、かいつ水風狂の騒客ならぬ時宜は彼とも

是とも其席のはたらき、春水は床の山の理論に

は落へからす、只今唯涼風のなつかしき頃な

水はえ

觀相

似を二つにきりかけて置

生て世に念<sup>?</sup>の油<sup>?</sup>断と<sup>?</sup>おろ<sup>?</sup>り<sup>?</sup>水

此禪門ハ年々やい七十はありにあらふ<sup>?</sup>た<sup>?</sup>水

といとすニやか<sup>?</sup>に初<sup>?</sup>も<sup>?</sup>の<sup>?</sup>目<sup>?</sup>す<sup>?</sup>、ある<sup>?</sup>娘<sup>?</sup>さ<sup>?</sup>あ

りてあの海花に用<sup>?</sup>怪<sup>?</sup>したる<sup>?</sup>た<sup>?</sup>く<sup>?</sup>ひ<sup>?</sup>には<sup>?</sup>あ<sup>?</sup>す。



物語面影

うりを二つにきりかけて置

橋に成惟光に成り垣になり

よしも曉もひかる君にしたかひまいらす水は

悪の鴉の樹おたし悪の園の中垣にも外人な

くとは(あつ)な水は涼氏もの流の傍を知らし

瓜をふたつに切かけて置

義家のみところ紙も折目高

南都より早瓜を奉りたりけるに解脫寺僧正陰

陽師晴明？段？師志明も並ひ居て腰刀ぬいてわ

(大東家文具チエーン特製)

りたりける。著聞集の佛と足る一し。猶句作  
は手な人とをしぬくひたす姿も足るゝかし

軍書面影

ふりを二つに切かけて置

謀及とハ穂にあうはれと時小今

頃ハ天正年中にや、時ハ今あめがしたし了五しなり

月哉と西の坊にて發句せし明智日向守と也し

るべし

瓜と二つにきりかけて置

瓜ハ安うしてと折く進て行



生ハカたして午前勝手をつまやく億病しのに  
 は跡部長坂あつハ薬師寺次郎左衛門とも之る  
 一し、そつ附句ハ午妻葛化にして比あつまし  
 には限つまし、結更一卷つ、きもつにハ序破  
 急あり運山あり是をよしてせはひさくを持て  
 江海汲かことしと也 猶兼題撰題の判詞句と  
 發句に成るならするに傳にや、寝よとの鐘聲  
 も過て五鼓を告れはをのく退座し侍る。比  
 夜話の傍にありてみさねみづからの健志に備  
 人としりしけつと濃霞主人のすゝめにまかせ

大東京文具チエーン特製

斯梓行におもひまぬ。即ち一夜の即昔存小は  
 いかけの沼のいかけあり漸忽あつなりんとゆ  
 りし給ハさつもみれ、ひみたまひたりりる。







